

平成27年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業 【地域日本語教育実践プログラム（B）】

実施内容報告書

受託団体名：特定非営利活動法人シェイクハンズ

1. 事業名称

・尾張北部地域等におけるネットワーキングによる日本語教育の推進

～生活者としての外国人支援・多文化の輪をひろげよう！～

2. 事業の目的

・平成25年度、平成26年度と、尾張北部地域の日本語教育機関・外国人支援機関のネットワークづくりと、その充実を図ってきた。26年度には特に更なる強化と啓蒙のためシンポジウムを、外国人支援機関だけでなく、地域組織・ネットワーク団体等で共催。地域活動団体との関係構築・連携も目指し、「生活者としての外国人」のための日本語教室を協働で運営。27年度は、企業や他分野の複数団体とも恒常的なネットワーク形成のためのネットワーク会議とし、その成果と経緯を検証し発信する事に重点を置く。

3. 事業内容の概要

- ①＜取組1＞2年間実施してきた連絡協議会への参加を、日本語教育・外国人支援団体のみならず、他分野の団体や企業、元組織にも呼びかけ、尾張北部の多文化共生のネットワークを恒常的にし、地域全体で、多文化共生にシフトした日本語教室を支える体制整備を図る。
- ②＜取組2＞連絡協議会の構成団体の協働で、「生活者としての外国人」のため地域日本語教室を開催し、地域内それぞれの課題・ニーズ 解決を図る。またその為、各地域内の多分野の団体と協働する。
- ③＜取組3＞ネットワークによる日本語教室紹介チラシを多言語で作成、発表・過程も含めて報告会を開き、成果発信する。
- ④＜取組4＞広く啓蒙の為のシンポジウムを、本事業開始の第一弾として早期に開催し、地域住民と外国人の関係性構築・日本語教室参加・本事業全体の日本人参加を促す。

4. 事業の実施体制について

米勢治子：全ての取組に対し、地域日本語コーディネーターとして業務を行う。特に取組4に対して、シンポジウムの後援者や登壇者、内容についての企画・コーディネート、シンポジウム当日のコーディネーター、分科会講師として。

土井佳彦：取組3における再委託先の代表。多文化共生のリソースを提供し、指導的立場の運営委員・協議会（ネットワーク会議）委員として。

早瀬裕子：江南地区での地域日本語教室コーディネーターとして企画、他団体・教室補助者等への依頼等。生活者としての外国人の為に、カリキュラム案に基づく指導・運営。

松本里美：連絡協議会（ネットワーク会議）のコーディネーターとして企画・運営。新規、他分野の参加団体・地縁組織・地元 組織との折衝、ゲストスピーカーの招聘など。主に、犬山・小牧・扶桑地区の日本語教室コーディネーターとして、カリキュラム案に基づく企画・運営。

愛知県国際交流協会：愛知県全域の関係機関への告知・広報。各啓発事業の後援

愛知県多文化共生推進室：愛知県全域の行政関係機関等への周知、行政への折衝

犬山市地域活動推進課：多文化共生の関連部局への周知と、当該地域コミュニティへの地元行事の外国人参加の促進

東海日本語ネットワーク：文化庁カリキュラム案による、地域日本語教室運営のノウハウ提供

多文化共生リソースセンター東海：取組全てにおけるリソースの提供と＜取組3＞の再委託事業実施

江南市国際交流協会、扶桑町多文化共生センター、大口町サラダボウル、犬山市国際交流協会：各市町における各国際組織への周知とボランティアへ・住民・外国人への広報

犬山市民活動支援センターの会：県内の主なNPO・団体へ周知。犬山市と近郊の行政・関係機関等との協力要請・折衝。

大口町まかせてネット、扶桑町町民活動センター：各市町の主な活動団体への広報と協力要請。

犬山ロータリークラブ：国際貢献委員会での多文化共生事業の協働・会員にむけての広報

5. 運営委員会の開催について

【運営委員】

1	栗木梨衣	(公財)愛知県国際交流協会
2	米勢治子	東海日本語ネットワーク
3	土井佳彦	(特活)多文化共生リソースセンター東海
4	大橋充人	愛知外国につながる子どもの母語支援プロジェクト
5	川島紀之	(特活)犬山市民活動支援センターの会
6	原正男	犬山市ロータリークラブ
7	早瀬裕子	江南市国際交流協会ふくらの家
8	松本里美	(特活)シェイクハンズ
9	小椋好和	扶桑町多文化共生センター

回	開講日時	時間数	場所	出席者	議題及び検討内容
1	平成 27 年 4 月 22 日(月) 18:30～20:30	2 時間	寺子屋シェイク ハンズ	川島紀之、土井佳彦 米勢治子、栗木梨衣 早瀬裕子、小椋好和 原 正男、松本里美	1. 25. 26 年度文化庁事業の成果と課題 の確認 2. 本年度事業の説明と趣旨確認 3. 各取組実施の時期について
2	平成 27 年 5 月 28 日(木) 18:30～20:30	2 時間	寺子屋シェイク ハンズ	川島紀之、土井佳彦 米勢治子、栗木梨衣 早瀬裕子、小椋好和 原 正男、松本里美	1. 今年度文化庁事業の各取組の開催時期 の検討 2. 取組4 啓発事業の開催日程と、内容
3	平成 27 年 1 月 18 日(月) 18:30～20:30	2 時間	寺子屋シェイク ハンズ	川島紀之、土井佳彦 (謝金辞退)米勢治子、 栗木梨衣、早瀬裕子、 小椋好和、松本里美	1. 今年度事業の各取組の進捗と報告 2. 啓発事業の成果と課題 3. 次年度に向けた事業の継続性の検討
4	平成 28 年 3 月 7 日(月) 16:00～18:00	2 時間	寺子屋シェイク ハンズ	川島紀之、土井佳彦 米勢治子、大橋充(謝 金辞退)早瀬裕子、小 椋好、和原 正男、松本 里美	1. 今年度事業の各取組の報告・成果と課題 2. ネットワークのあり方について 3. 次年度以降の取組の方向性と、新たな連 携先の検討

6. 取組についての報告

取組1:尾張北部の多文化共生・地域日本語教育のネットワークづくり

(1) 体制整備に向けた取組の目標

- ・ネットワークづくりの取組のなかで、各地域(各市町村)の日本語教室が、「標準的なカリキュラム案」の理念を教室運営に充分生かせるよう、協議等を重ねると共に、異分野の多団体も含めた多文化共生の社会づくりを目的とするネットワークの形成に向けた整備ができる。

(2) 取組内容

- ・約 5,000 人の外国人が尾張北部の2市2町に暮らしているが、散在地区としての認識から「生活者としての外国人」としての理解に、遠く及ばない。学習者は勤務等の都合で、隣接する複数の市町に渡って参加する傾向があり、各日本語教室独自の日本語教育のなかで、あまり成果をあげていない状態がある。そこで、平成 25 年度から文化庁事業での尾張北部の日本語教育機関等で連絡協議会を開催してきたが、今年度も 10 回開催し、標準的なカリキュラム案に基づく教室運営の協議をはじめ、各市町での取り組みの情報交換を積極的に行った。

このネットワークのための会議参加者を日本語教育・支援団体に留めず、特に行政や異分野の地域団体にも広げ、当事者の外国人住民の声を聞く場とした。とよた日本語能力判定(とよた日本語学習支援システム)の研修もおこない、この地域の日本語教育の場の活性化を図った。

(3) 対象者

- ・尾張北部地域での日本語教育組織や個人、多文化共生に関わる組織、行政の多文化共生担当、地域活動団体、外国人キーマン

(4) 参加者の総数 26 人※延べ人数ではなく、参加した人数を記載

そのうちの日本語学習者数 3 人

【出身・国籍別内訳】

中国	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパール	インドネシア	タイ	ペルー	フィリピン	日本
3		1					1	1	19

※その他の国籍と人数:

(5) 開催時間数(回数)

- ・ 27.5 時間 (2.5 時間 × 9 回、2 時間 × 1 回、3 時間 × 1 回)

(6) 活動の内容

回	開講日時	時間数	場所	出席者	取組のテーマ	授業概要	指導者名	補助者名

1	平成 27 年 4 月 27 日 18:30～21:00	2.5 時間	寺子屋シェ イクハンズ	土井佳彦 米勢治子 早瀬裕子 川島紀之 土田富三子 原正男 小椋好和 後藤よし美 馬永森 斉藤千春 丹羽典子 森川バトリシア 大橋充人(謝 金辞退) デグズマンエドナ 角田エリザ 松本里美	今年度の事業について	1..あいさつとメンバー紹介 2.今年度文化庁事業の説明 3.多文化共生フォーラムについて 4.ネットワークでの日本語教室について 5.その他、アピールなど	進行役 松本里美	事務局 斉藤知子 (謝金辞退)
2	平成 27 年 5 月 28 日 18:30～21:00	2.5 時間	寺子屋シェ イクハンズ	土井・米勢 早瀬・原・馬 土田・小椋 後藤・斉藤 川島・前田 丹羽・森川 角田・松本	フォーラムについて	1. 第 1 回 NW 会議の内容確認 2. 取組4「多文化共生フォーラム」について 3. 取組 日本語教室について	進行: 松本里美	事務局: 斉藤知子 (謝金辞退)
3	平成 27 年 6 月 29 日 18:30～21:00	2.5 時間	寺子屋シェ イクハンズ	米勢・エドナ (謝金辞退) 早瀬・馬・劉 土田・小椋 後藤・斉藤 川島・前田 丹羽・森川 角田・松本 松本一子 「愛知県防災リーダー会」 犬山支部	フォーラムプログラム	1.「多文化共生フォーラム」 ・プログラムについて ・各教室・NW での役割 ・第1分科会 HUG について(防災リーダー会より) ・事前準備の日程 2・アピール・情報交換	進行: 松本里美	事務局: 斉藤知子 (謝金辞退)
4	平成 27 年 7 月 12 日 10:00～12:00	2 時間	犬山国際 観光センタ ー フロイデ	米勢・エドナ 早瀬・馬・原 土田・小椋 後藤・斉藤 川島・前田 畦地・森川 角田・松本 「愛知県防災リーダー会」 犬山支部	フォーラム準備	1. 取組2 日本語教室案の提案 2.「多文化共生フォーラム」 ・進行確認 ・分科会毎の確認	進行: 松本里美	事務局: 斉藤知子 (謝金辞退)

5	平成 27 年 7 月 30 日 18:00～21:00	2.5 時間	楽田ふれあいセンター	米勢・土井 エドナ・馬・劉 早瀬・原 土田・小椋 後藤・斉藤 川島・前田 森川・角田・ 松本 「愛知県防災 リーダー会」 犬山支部	フォーラム反省WS	1. フォーラムの反省 ① 基調講演、全 体の反省 ② 各分科会の 反省 ③ 次回へ向け ての提案 2. 日本語教室開催地 域 プログラムにつ いて	進行: 松本里美	事務局: 斉藤知子 (謝金辞退)
6	平成 27 年 10 月 7 日 18:30～21:00	2.5 時間	寺子屋シェイクハンズ	米勢・土井 エドナ・劉 早瀬・原 土田・小椋 後藤・斉藤 川島・角田 森川・畦地・ 松本・大橋 (謝金辞退)	日本語教室の進捗	1. 取組2日本語教室 の進捗と近況報告 2. 研修会 案 3. 取組3 パンフレッ トづくり について (再委託) 4. アピール・情報交 換	進行: 松本里美	事務局: 斉藤知子 (謝金辞退)
7	平成 27 年 10 月 18 日 13:30～16:30	3 時間	寺子屋シェイクハンズ	前田・丹羽 エドナ・馬 早瀬・原 土田・小椋 後藤・斉藤 川島・角田 森川・松本里 北村祐人 木村あずさ 入江友理 三浦幸恵(謝 金辞退) 松本晃(謝金 辞退) 斉藤輝幸(謝 金辞退)	研修会	1. とよた日本語学習 支援システム(講 義)について 2. 研修 3. 感想と意見交換会	進行:松本 講義・研修 入江友理 木村あずさ 北村祐人 (名古屋大 学とよた日 本語学習支 援システ ム)	事務局: 斉藤知子 (謝金辞退)
8	平成 27 年 11 月 16 日 18:30～21:00	2.5 時間	寺子屋シェイクハンズ	米勢・土井 エドナ・馬 早瀬・原 土田・小椋 後藤・斉藤 川島・角田 森川・畦地・ 前田・松本	パンフレット作製について1	1・取組2 日本語教室 の進捗 2. 前回の研修のふり 返り 3. 取組3 パンフレッ トについて 4. 今後・次年度以降 の NW 会議につ いて 5. アピール・情報交 換	進行: 松本里美	事務局: 斉藤知子 (謝金辞退)
9	平成 27 年 12 月 14 日 18:30～21:00	2.5 時間	寺子屋シェイクハンズ	米勢・武田 エドナ・松本 早瀬・ 土田・小椋 後藤・斉藤 川島・角田 森川・前田 丹羽	2 パンフレット作製について	1. 取組3 パンフレッ トについて 2. AIA からの情報提 供 3. 次年度文化庁事業 について 4. アピール・情報交換	進行: 松本里美	事務局: 斉藤知子 (謝金辞退)

10	平成 28 年 1 月 18 日 18:30～21:00	2.5 時間	寺子屋シェイクハンズ	米勢・武田 エドナ・松本 早瀬・土田・ 小椋・後藤・ 斉藤・川島・ 角田・森川 前田・丹羽・ 原・馬・畦地	次年度について2	1. 取組3 パンフレットについて 2. 1/31 日本語教室、広域イベントについて 3. 次年度 NW による啓発事業(文化庁?) 4. AIA の次年度情報 5. アピール・情報交換	進行: 松本里美	事務局: 斉藤知子 (謝金辞退)
11	平成 28 年 2 月 15 日 18:30～21:00	2.5 時間	寺子屋シェイクハンズ	米勢・土井 エドナ・松本 早瀬・土田・小椋 後藤・斉藤 川島・角田 森川・前田 丹羽(謝金辞退)・劉・原	パンフレット発表会とネットワークについて	1. 取組3 パンフレットについて(最終案) 2. パンフレット作成発表会について 3. 次年度以降の NW 会議	進行: 松本里美	事務局: 斉藤知子 (謝金辞退)
12	平成 28 年 3 月 7 日 18:30～21:00	2.5 時間	寺子屋シェイクハンズ	米勢・土井 エドナ・松本 早瀬・原・馬 土田・小椋 後藤・斉藤 川島・角田 森川・前田 畦地・丹羽・ 大橋充人(謝金辞退)	今年度反省と次年度へむけて	1. 全体の反省 2. NW 会議の反省 WS 3. 各団体の次年度への方向性・取組	進行: 松本里美	事務局: 斉藤知子 (謝金辞退)

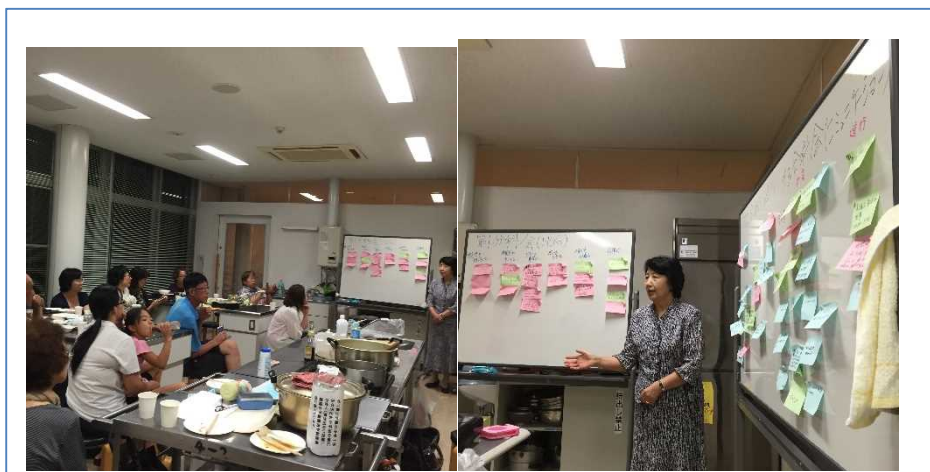
(7) 特徴的な活動風景(2～3回分)

取組事例①

【第 5 回 平成27年7月30日】

特に、7 月 12 日の「多文化共生フォーラム」の反省を重点的に。

防災リーダー会のメンバーも参加し WS。多くの成果・課題が出た。



【第9回 平成27年12月14日】

市町を越えてつくる予定の「尾北地域の日本語教室パンフレット」（多言語版）。
まずイメージを共有して、記載項目を検討。各教室の学習者といっしょに、自分の教室が、「どんなところ？」「たのしいことは？」と考える良い機会。



(8) 目標の達成状況・成果

①運営委員会・NW 会議のふり返りより

- ・年越しの NW 会議の成果で、ネットワークを組む各団体が、標準的なカリキュラム案を活用し、地域の多文化共生を目指す「地域日本語教室」を運営する体制が整ってきた。
- ・今期はシェイクハンズが、犬山国際交流協会日本語教室と、初めてカリキュラム案を活用した教室を共催することができ、次年度には、大口町の教室が江南市とのコラボで、多文化共生イベントを予定するなど、カリキュラム案活用の連携が確実に広がってきた。

②防災リーダー会、日赤奉仕団など、異分野との連携も進み、特に防災リーダー会とは、次年度からも定期的な啓発イベントの企画につながる可能性も見えてきた。

(9) 今後の改善点について

- ・行政関係者のネットワーク会議出席が少なく、犬山市のみにとどまったので、次年度からは、他の市町、もっと多分野の団体を巻き込めるとよい。
- ・なかなか、異分野の参加者が増えていけないので、会議そのものの形態を見直す必要があるのでは。

取組2： 尾張北部地域のネットワークによる日本語教室「地域課題やライフステージに合わせた日本語を学ぼう

取組2-1「やさしい日本語で防災を学び、災害に備えよう」

(1) 体制整備に向けた取組の目標

- ①尾張北部の各日本語教育機関の指導者が「生活者としての外国人」に対するカリキュラム案を活用し、
場面想定で工夫を凝らせた指導が、できるようになる。
- ②ポートフォリオ等を活用し、学習者の日本語習得の評価ができるようになる。
- ③日本人の参加者と仲良くなり、今後、さらに社会参画できることに繋がる。
- ④同じ課題や、ライフステージを持つ学習者同志で、仲間や自助組織づくりに繋がる。

(2) 取組内容

- ①この地域に定住する外国人の特長として、複数の教室に渡って参加できる事を利用し、「防災」をテーマに 2 市1町で、特徴のある防災を実施することとし、扶桑町「おしゃべりカフェ」は、フォーラムとも連動し、避難所運営ゲーム(HUG)をこの地域の外国人で初めて体験した。
- ②扶桑地域の教室に通う外国人の特徴＝比較的中小企業に勤める若い研修生が多く、企業以外の日本人と交流が少ないので、日本人と共に学ぶ教室とした。

(3) 対象者

扶桑町及び近郊に住む外国人住民と、地域の日本人

- (4) 参加者の総数 31 人※延べ人数ではなく、参加した人数を記載
そのうちの日本語学習者数 16 人

【出身・国籍別内訳】

中国	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパール	インドネシア	タイ	ペルー	フィリピン	日本
11			3	2					15

※その他の国籍と人数:

(5) 開催時間数(回数)

- ・ 12. 5 時間 (2 時間 3 回、2. 5 時間×1 回、4 時間×1 回 、全 5 回)

(6) 活動の内容

回	開講日時	時間数	場所	受講者数	取組のテーマ	授業概要	指導者名	補助者名
1	平成 27 年 7 月 5 日(日) 13:30-15:30	2 時間	扶桑町総合 体育館	26	HUG、災害 に関する ことばを 学ぶ	災害や防災用語を、やさしい 日本語で、読み書きも含めて 理解する。(HUG 準備兼ね災 害に関する言葉の習得)	小椋好和 渡辺善夫 石木芳彦	松山清子
2	平成 27 年 7 月 12 日(日) 14:00～16:30	2.5. 時間	犬山国際観 光センター	20 (37)	避難所運営 ゲームを体 験しよう。	静岡県防災局発行、外国 人向けのカードを使い、実際 に HUG を日本人と共に体験	小椋好和 渡辺善夫 石木芳彦 (犬山市防 災安全課)	松山清子
3	平成 27 年 8 月 30 日(日) 13:30～15:30	2 時間	扶桑町総合 体育館	20	命を救う方 法を学ぶ	怪我の応急措置と、救急蘇 生法の実地、合わせて AED 使い方の研修。 119 番の通報の仕方も学ぶ	小椋好和 渡辺善夫 石木芳彦 (丹羽消防 署協力)	松本里美
4	平成 27 年 9 月 6 日(日) 11:00～15:30	4 時間	名古屋市防 災センター	29	防災体験	地震、伊勢湾台風 3D、 煙避難の体験と、防災 レクチャー	小椋好和 石木芳彦 渡辺善夫	松山清子
5	平成 27 年 9 月 20 日 13:30～15:30	2 時間	扶桑町中央 公民館	30	災害に備え て、自分や 家族ででき る事	ハイゼックスによって米を炊く 方法の実施、家具転倒防止 や、持ち出し袋の紹介を、 教材例集を利用し、学ぶ。 シリーズ全体の振り返り。	小椋好和 渡辺善夫 石木芳彦	松山清子

(7) 特徴的な活動風景

取組事例①

【第2回 27年7月12日】

避難所運営ゲームを、外国人学習者と近隣住民で、外国人向けの HUG カードを使って実施した。

（取組4のフォーラムの分科会のひとつ「防災」の中で実施）

公募の住民と共にグループング、日本人がカードを読み上げ、避難所での場所・位置を考えていく。
分からない言葉やり方日本人がフォローして共に図上で、避難所を造りあげていった。



（8）目標の達成状況・成果

・アンケート16人中、10人提出。日本語の上達について6人が上達、変わらないが4人。

生活面では、8人が向上・やや向上と答え「日本語そのものより、生活面での学習効果の方があった」と答えている。

・プログラムの満足度は90パーセントが満足、日本語学習については、100パーセントが「もっと学びたい」としており、今後につながる結果だったが、生活上の行為をとおして「日本語を学んでいるという実感が薄いのではと、推察される。

（9）今後の改善点について

・生活上の行為に対する日本語(ことば)をもっと、確実に学べるよう、振り返りシートを活用させることが重要と、思われる。

取組2-2「災害時に備え、日本語で対応する」

（1）体制整備に向けた取組の目標

- ①尾張北部の各日本語教育機関の指導者が「生活者としての外国人」に対するカリキュラム案を活用し、場面想定で工夫を凝らせた指導が、できるようになる。
- ②ポートフォリオ等を活用し、学習者の日本語習得の評価ができるようになる。
- ③日本人の参加者と仲良くなり、今後、さらに社会参画できることに繋がる。
- ④同じ課題や、ライフステージを持つ学習者同志で、仲間や自助組織づくりに繋がる。

（2）取組内容

- ①この地域に定住する外国人の特長として、複数の教室に渡って参加できる事を利用し、「防災」をテー

マに2市1町で、特徴のある防災に関する日本語教室を実施することとし、江南市国際交流協会「ふくらの家」は、フォーラムで実施したHUG(避難所運営ゲーム)を踏まえ、最終的に、DIG(災害図上訓練)実施を目的とした教室を開催。

- ②地域で防災活動をする団体に協力を仰ぎ、助け合う関係性づくりの第一歩を目指した。
 ③比較的長く日本に暮らす外国人が多いが、訓練などへの参加体験がないので、特にDIGでは地域住民に広く呼びかけ、参加を仰いだ。
 ④託児を設け、乳幼児を持つ親の参加を促した。

(3) 対象者

江南市及び近郊に住む外国人と、地域の日本人

(4) 参加者の総数 76 人※延べ人数ではなく、参加した人数を記載

そのうちの日本語学習者数 17 人

【出身・国籍別内訳】

中国	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパール	インドネシア	タイ	ペルー	フィリピン	日本
4	1	4	2				2	3	

※その他の国籍と人数：モンゴル 2

(5) 開催時間数(回数)

・ 17 時間 (2 時間 × 5 回、4 時間 × 1 回、3 時間 × 1 回)

(6) 活動の内容

回	開講日時	時間数	場所	受講者数	取組のテーマ	授業概要	指導者名	補助者名
1	平成 27 年 9 月 14 日(月) 10:00~14:30	4 時間	藤里国際 ルーム	54	災害の話	講座 非常食づくり ホットタオル体験 試食会 メモカード	早瀬裕子 佐野宴 若井雄二	補助： 松本里美 託児者： 柴田恵津子 河村礼子
2	平成 27 年 9 月 18 日 (金) 13:00~15:00	2 時間	ふくらの家	14	自分の課題づくり	前回の実習のメモカードから 良く分かった事 あまり分らなかったことに分ける。 支援されるだけでなく支援者にもなれる。	早瀬裕子 佐野宴 若井雄二	補助： 松本里美 託児者： 柴田恵津子 河村礼子
3	平成 27 年 9 月 25 日(金) 13:00~15:00	2 時間	ふくらの家	13	ことば・表現	地震だ！・助けて！・にげて・急いで・危ない 大丈夫・危険・けが・病気 避難訓練など	早瀬裕子 佐野宴 若井雄二	補助： 松本里美 託児者： 柴田恵津子 河村礼子
4	平成 27 年 10 月 7 日(水)	2 時間	ふくらの家	14	これまでのふりかえり	先回の災害講DVDを見て、「この日本語の意味分	早瀬裕子 佐野宴 若井雄	補助： 松本里美 託児：

	13:00～15:00					かる?」マイ日本語カードを作成。 表:漢字、裏:絵 自分が分かる言葉	二	松山清子
5	平成 27 年 10 月 16 日(金) 13:00～15:00	2 時 間	宮田学習 等供用施設	10	災害カード づくり	「災害カード」づくり 既成の「災害カード」見て、 内容を日本語で書けるようにする。住所 国籍 電話番号 生年月日、緊急時連絡先 血液型 在 留カード番号 避難所	早瀬裕子 佐野宴 若井雄二	補助: 松本里美 託児者: 柴田恵津 子 松山清子
6	平成 28 年 12 月 14 日(月) 13:00～15:00	2 時 間	ふくらの家	14	非常時の 準備	非常用持ち出し袋 どんな物が必要か、話し 合い、名前・使い方を覚える	早瀬裕子 佐野宴 若井雄二	補助: 松本里美
7	12 月 23 日 (水) 13:00～16:00	3 時 間	江南団地 集会場	76	DIG を体 験	自分の家の地形を知り、 避難所を確認。 安全な経路を図上で辿 る。弱者への支援 振り返り・パンフ作成への 意見を聞く。	早瀬裕子 佐野宴 若井雄二	託児者: 松山清子 高木茂子 柴田恵津 子・ 講義・指導 補助者: 江口雅明 尾関博 補助:松本 里美

(7) 特徴的な活動風景

取組事例①【第1回 27 年 9 月 14 日】

日赤愛知県支部の協力で、災害 DVD を見て、災害に関する講話を聴き、災害に関する日本語を覚えた。その後、ハイゼックスによる炊き出し、ホットタオルの使い方を覚えた



取組事例②

【第 7 回 28 年 12 月 23 日】

愛知県防災リーダー会江南支部の協力で、DIG を体験。

日本人住民とともに、地図に避難場所を記したり、経路や危険箇所の確認をした。



(8) 目標の達成状況・成果

- ・アンケートの提出は、10 人に留まったが、日本語・生活面でも上達したが、100 パーセントで、プログラムにも満足、今後の日本語学習意欲も 100 パーセントであった。
- ・イベント的なプログラムには、地域住民の参加が多く見られ、FACE TO FACE の関係性もでき、今後、外国人の地域参加が期待できるのでは。

(9) 今後の改善点について

- ・多くの人に参加できてとても良かったが、人数が多くて、なかなかプログラムが進めない事もあるので、ある程度、目的に合わせて人数を設定して、確実に効果を上げることも大切？今後、繰り返し実施のなかで、確実に非難経路等を覚えてもらえると良い。
- ・子ども連れの学習者が比較的多いので、全回、託児を設けられたら、良かったのでは。

取組2-3 生活のための日本語「文字を知っていればこんなにお得！こんなに便利！」

(1) 体制整備に向けた取組の目標

- ①尾張北部の各日本語教育機関の指導者が「生活者としての外国人」に対する標準的なカリキュラム案を活用し、場面想定で工夫を凝らせた指導が、できるようになる。
- ②ポートフォリオ等を活用し、学習者の日本語習得の評価ができるようになる。
- ③日本人の参加者と仲良くなり、今後、さらに社会参画できることに繋がる。
- ④同じ課題や、ライフステージを持つ学習者同志で、仲間や自助組織づくりに繋がる。

(2) 取組内容

- ①この地域に定住する外国人の特長として、複数の教室に渡って参加できる事を利用し、それぞれの地域課題やニーズに合わせた日本語教室を協働開催。
- ②シェイクハンズ(犬山)では、長い期間日本に暮らしているが、日本語の読み書きができない外国人が多く、「読み書き」に対するニーズが大変高いことから、生活に役立つ日本語としての「読み書き」を中心とした教室を開催した。
- ③学習者がそれぞれ、自分にとって必要な教材を持ち寄る形をとり、ほぼマンツーマンで、日本人といっしょに、学習できる内容。

- (4) 参加者の総数 33 人※延べ人数ではなく、参加した人数を記載
そのうちの日本語学習者数 23 人

【出身・国籍別内訳】

中国	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパール	インドネシア	タイ	ペルー	フィリピン	日本
6		3	1		1		5	1	10

※その他の国籍と人数：ボリビア 2、トルコ3、ロシア1、

- (5) 開催時間数(回数) ・ 20 時間 (2 時間 × 4 回、4 時間 × 3 回)

(6) 活動の内容

回	開講日時	時間数	場所	受講者数	取組のテーマ	授業概要	指導者名	補助者名
1	平成 27 年 10 月 4 日(日) 10:30～15:00	4 時間	寺子屋シェイクハンズ	19	オリエンテーション	とよた日本語能力判定 (Can do および読み書き問題)による日本語能力評価、文字の基礎知識 (習字による漢数字の書き方) / Can-do による学習目標設定	米勢治子 松本晃 斉藤輝幸	斉藤千春 (通訳) 森川 ぱ 託児者: 柴田恵津子 河村礼子
2	平成 27 年 10 月 11 日(日) 10:30～15:00	4 時間	寺子屋シェイクハンズ	10	スーパーでお弁当を買う	スーパーなどを訪問し、看板・表示・商品表示などの読みたいものを写真に撮る(データの送付) / 買ったもの(お弁当)のレシートを読む / スーパーのチラシを読む / 撮った写真の文字を読む	米勢治子 松本晃 斉藤輝幸	斉藤千春 (通訳) 森川 ぱ 託児者: 柴田恵津子 河村礼子
3	平成 27 年 10 月 18 日(日) 10:30～12:30	2 時間	寺子屋シェイクハンズ	8	食品の表記等を読もう	前回の復習(PPT の写真を見て説明する) / 食材の表記などを読む	米勢治子 松本晃 斉藤輝幸	斉藤千春 (通訳) 森川 ぱ
4	平成 27 年 10 月 25 日(日) 10:30～12:30	2 時間	寺子屋シェイクハンズ	9	家の中の文字	前回の復習(振り返りシートの説明) / 家の中の文字(家電などの写真)を読む	米勢治子 松本晃 斉藤輝幸	斉藤千春 (通訳) 森川 ぱ
5	平成 27 年 11 月 1 日(日) 10:30～12:30	2 時間	寺子屋シェイクハンズ	8	回覧板を読む	前回の復習(振り返りシートの説明) / 回覧板を読む	米勢治子 松本晃 斉藤輝幸	斉藤千春 (通訳) 森川 ぱ
6	平成 27 年 11 月 8 日(日) 10:30～12:30	2 時間	寺子屋シェイクハンズ	10	チラシを読む	前回の復習(振り返りシートの説明) / 地域行事や施設案内などのチラシを読む	米勢治子 松本晃 斉藤輝幸	斉藤千春 (通訳) 森川 ぱ 託児者: 柴田恵津子 河村礼子
7	平成 27 年 11 月 15 日(日) 10:30～15:00	4 時間	寺子屋シェイクハンズ	12	全体の振り返り・成果	学習全体のふり返し→発表準備→【昼食】→成果発表会 / とよた能力判定 (Can do および読み書き問題)による日本語能力評価 振り返り・パンフレット作成への意見を聞く。	米勢治子 松本晃 斉藤輝幸	斉藤千春 (通訳) 森川 ぱ 託児: 河村礼子 柴田恵津子

(7) 特徴的な活動風景

取組事例①

【第 1 回 27 年 10 月 4 日】

自己紹介。「漢字が読み書きできたら、こんなに便利」をまず伝えた。

学習者の読み書き・会話の能力を測り、各自の目標を決めた。

その後、習字によって、漢数字などの筆順を紹介しながら、日本の文字を書くときの基礎知識を伝えた。



取組事例②

【第2回 27年 10月11日】

・スーパーなどを訪問し、看板・表示・商品表示などの読みたいものを写真に撮る（データの送付）、お買い物をする。／買ったもの（お弁当）のレシートを読む／スーパーのチラシを読む／撮った写真の文字を読む。・スーパーで自分が写してきた教材を使って、それぞれ、分かったことや文字を調べて発表。



(8) 目標の達成状況・成果

- ・毎回、自分に対して葉書きを出したので、学習者ほぼ全員が、自分の住所と名前を漢字で書くことができたようになった。これにより、葉書が届いたり、指導者へ送ったりする楽しみも増え、モチベーションが上がった。
- ・ボランティアが学習者の変化に気づき、共に喜べることができ関係性が増し、ボランティアのモチベーションも上がった。
- ・生活者が、仕事をしながら日本語学習を続けることの困難さを感じていたが、この教室で仲間意識が芽生え、アンケート結果からも、日本語の読み書きの上達が確認でき、今後も継続しての学習が予想される。
- ・振り返りシートのなかでも、学習したことを繰り返し書いたことが、かなり、読み書きの向上につながった。
- ・最終回で成果発表したことで、学習者の上達を全員が喜ぶことができ、続いての教室活動に、続けることができる。

(9) 今後の改善点について

- ・午後からのプログラムがあるときでも、学習者が帰宅してしまわない工夫が必要。
- ・学習者が自分に必要な教材集めをする=生活のなかで、日本語学習の意識を持ち続けることは、きわめて困難な事が分かったので、教材例集をもとに、もっと工夫することが必要と思われる。

取組2-4: 安心・安全に暮らすために、交通ルールを守ろう。

(1) 体制整備に向けた取組の目標

- ①尾張北部の各日本語教育機関の指導者が「生活者としての外国人」に対するカリキュラム案を活用し、場面想定で工夫を凝らせた指導が、できるようになる。
- ②ポートフォリオ等を活用し、学習者の日本語習得の評価ができるようになる。
- ③日本人の参加者と仲良くなり、今後、さらに社会参画できることに繋がる。
- ④同じ課題や、ライフステージを持つ学習者同志で、仲間や自助組織づくりに繋がる

(2) 取組内容

- ①地域・教室を超えて、警察の話しや110番体験に参加し、内容を復習する形での「安心・安全教室」を実施した。

(3) 対象者

扶桑・大口近郊に住む外国人と地域住民

(4) 参加者の総数 31 人※延べ人数ではなく、参加した人数を記載

そのうちの日本語学習者数 14 人

【出身・国籍別内訳】

中国	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパール	インドネシア	タイ	ペルー	フィリピン	日本
6	1		4	2	1				17

※その他の国籍と人数:

(5) 開催時間数(回数)

・ 6 時間 (2 時間 × 全 3 回)

(6) 活動の内容

回	開講日時	時間数	場所	受講者数	取組のテーマ	授業概要	指導者名	補助者名
1	平成 28 年 2 月 7 日(日) 13:30~15:30	2 時間	扶桑町中央 公民館	10	犯罪から自分や家族を守ろう	家をまもるための かぎ の かけ方。 いろいろな防犯グッズ紹介	小椋好和 渡辺善夫 石木芳彦	松本里美
2	平成 28 年 2 月 14 日(日) 13:30~15:30	2 時間	扶桑町中央 公民館	14	交通ルール を守ろう	日本の交通ルール 全般 自転車のルール いろいろな標識を覚えよう	小椋好和 渡辺善夫 石木芳彦	松本里美
3	平成 28 年 2 月 21 日(日)	2 時間	扶桑町中 央公民館	13	防犯と交通 安全	さまざまなルールの復習 交通ルールを書いておぼえ よう 振り返り・パンフレット作成へ の意見を聞く。	小椋好和 渡辺善夫 石木芳彦	松本里美

※学習者は、1 月 31 日の「地域で安全に暮らすために、おまわりさんの話をきこう」にも参加、計 8 時間の受講。

(7) 特徴的な活動風景

取組事例①

【第1回 28 年 2 月 7 日】

空き巣や強盗など、防犯に関することばをおぼえ、カードに記入。
空き巣防止の施錠、二重ロックの紹介と説明。
特殊な鍵等の紹介。



取組事例②

【第2回 28年2月21日】

実際の交通標識を覚える。特に、自転車の走る場所を復習。
自転車盗に遭わないために、二重ロックを勧める。



(8) 目標の達成状況・成果

- ・アンケートの提出率は、100パーセントで、前回と同じく、「やや生活ができるようになった」が90パーセントだが、日本語の上達については時間が少ないせいか、「かわらない」がほとんど。
- 日本語学習のモチベーションは上がっている。
- ・日本人の参加が多いので、地域での今後の親交に期待がもてる。
- ・扶桑町の教室で、初めて、ふり返しシートによるふり返りができた。

(9) 今後の改善点について

- ・学習者が 日本語の習得度が上がった、と、感じるができるよう、もう少し回を重ねて、繰り返しのできるプログラムが必要。

取組2-5:「安心・安全に暮らすための日本語教室」

(1) 体制整備に向けた取組の目標

- ①尾張北部の各日本語教育機関の指導者が「生活者としての外国人」に対するカリキュラム案を活用し、場面想定で工夫を凝らせた指導が、できるようになる。
- ②ポートフォリオ等を活用し、学習者の日本語習得の評価ができるようになる。
- ③日本人の参加者と仲良くなり、今後、さらに社会参画できることに繋がる。
- ④同じ課題や、ライフステージを持つ学習者同志で、仲間や自助組織づくりに繋がる。

(2) 取組内容

- ・地域での生活者として安心・安全に暮らせるように。また、くらしの中の不安を解消できるような、情報伝達と、体験の場をつくり、地域住民ともふれあうイベントも含んだ日本語教室を開催し、学習者も市町や日本語教室を越えて共に参加できる機会とした。(全9回)
- ・イベントに当たっては、管内警察署(犬山警察署)の全面協力を得、生活安全課・防犯課・交通課・警務課・それぞれに体験できる講座内容とした。
- ・イベントで学んだことを、以降の教室で内容ごとに復習し、日本語の読み書きも含めて、確実に生活上の行為ができるよう、目指した。

(3) 対象者

- ・尾張北部地域に住む外国人と地域の住民

- (4) 参加者の総数 69 人※延べ人数ではなく、参加した人数を記載
そのうちの日本語学習者数 39 人

【出身・国籍別内訳】

中国	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパール	インドネシア	タイ	ペルー	フィリピン	日本
7	1	5	10	2	1		7	4	30

※その他の国籍と人数: ボリビア 2

(5) 開催時間数(回数)

- ・ 22 時間 (2 時間 × 7 回、4 時間 × 2 回、全 9 回)

(6) 活動の内容

回	開講日時	時間数	場所	受講者数	取組のテーマ	授業概要	指導者名	補助者名
1	平成 28 年 1 月 10 日(日) 10:30~12:30	2 時間	寺子屋シェイクハンズ	11 人	くらしで心配・不安なこと	あいさつ・自己紹介、日本の生活での心配なことを書き出して、どうするか？みなで共有する。	松本晃 斉藤輝幸 斉藤千春 松本里美	松山清子 通訳:森川 エドナ 託児:柴田 恵津子、河 村礼子
2	平成 28 年 1 月 17 日(日) 10:30~12:30	2 時間	寺子屋シェイクハンズ	9 人	病気やケガで病院にいくために。	病気のなまえ、症状の説明の仕方、問診表の書き方、診察時のロールプレイ	松本晃 斉藤輝幸 斉藤千春	松山清子 通訳:森川 エドナ 託児:柴田 恵津子、河 村礼子
3	平成 28 年 1 月 24 日(日) 10:30~12:30	2 時間	寺子屋シェイクハンズ	7 人	薬を正しく使うために	薬の名前と種類、アレルギーなど。説明書の理解	松本晃 斉藤輝幸 斉藤千春	松山清子 通訳:森川 エドナ 託児:柴田 恵津子、河 村礼子
4	平成 28 年 1 月 31 日(日) 10:30~15:30	4 時間	楽田ふれあいセンター	61	スペシャルイベント 「地域で安全にくらすために、おまわりさん	1、講話、2、空き巣に入られない為に鍵の種類とかけ方 3. 交通安全・自転車の正しい乗り方、ルール 4. パトカー試乗	松本晃 斉藤輝幸 松本里美	斉藤千春 通訳:森川 角田 エドナ 託児:柴田 恵津子、河

					の話をきこう」	5. 災害時、非常時、110 番のかけ方		村礼子
5	平成 28 年 2 月 7 日(日) 10:30～12:30	2 時間	寺子屋シェイクハンズ	13 人	事故や災害にあったとき	1. 助けを求める時、ところ 2. 119 番、110 番、118 番、 177 番について 3. 応急措置は	松本晃 斉藤輝幸 斉藤千春	松山清子 通訳:森川 エドナ 託児:柴田 恵津子、河 村礼子
6	平成 28 年 2 月 14 日(日) 10:30～12:30	2 時間	寺子屋シェイクハンズ	10 人	被害にあったとき、あわなない為に	110 番の通報のしかた 被害にあわない為にできること(家・自転車・車)	松本晃 斉藤輝幸 斉藤千春 松本里美	松山清子 通訳:森川 エドナ 託児:柴田 恵津子、河 村礼子
7	平成 28 年 2 月 21 日(日) 10:30～12:30	2 時間	寺子屋シェイクハンズ	9 人	自転車のルール	自転車の新ルールを理解する。	松本晃(謝金辞退) 斉藤輝幸 斉藤千春 松本里美	松山清子 通訳:森川 エドナ 託児:柴田 恵津子、河 村礼子
8	平成 28 年 2 月 28 日(日) 10:30～12:30	2 時間	寺子屋シェイクハンズ	8 人	災害に備える	災害に備えてできること 1. 家族との連絡方法 2. 家具の転倒防止 3. 備蓄 など	松本晃 斉藤輝幸 斉藤千春	松山清子 通訳:森川 エドナ 託児:柴田 恵津子、河 村礼子
9	平成 28 年 3 月 6 日(日)	4 時間	名古屋市 防災センター	15 人	災害の体験、見学	1. 防災センターの役目 2. 煙 3. 震度7 体験 4. 台風・津波 3D 映像 5. 全体ふりかえり、パンフレットへの意見	松本晃 松本里美 斉藤輝幸	斉藤千春 通訳:森川 (謝金辞退) 託児:柴田 恵津子、河 村礼子

(7) 特徴的な活動風景(2～3回分)

取組事例①

【第 4 回 1 月 31 日】

「地域で安全にくらすために、おまわりさんの話をきこう」

地域の 3 教室(犬山・扶桑おしゃべりカフェ・シェイクハンズ)で学習する外国人住民と、地域住民約 60 人が参加。

犬山警察署の協力で、1、講話、2、空き巣に入られない為に鍵の種類とかけ方

3. 交通安全・自転車の正しい乗り方、ルール

4. パトカー試乗 5. 災害時、非常時、110 番のかけ方 などを実施。



取組事例②

【第7回 28年2月28日】

名古屋市港区防災センターへ、見学。

1. 防災センターの役目 2. 煙
3. 震度7 体験 4. 台風・津波 3D映像
5. 全体ふりかえり



(8) 目標の達成状況・成果

- ・イベントのみ参加の学習者以外は、取組 2-3「生活のための日本語」からの参加者が多く、学習に対するモチベーションが高く、ふり返しシート等の記入にも熱心に取り組めるようになった。
- ・学習は、日本語の上達を意識しながら、学べるようになった。
- ・ボランティア指導者も、教材例集を活用し交代で作成し、共有するなど、かなり積極的に取り組む姿勢ができた。
- ・日本人ボランティアとは、地域での親交が続き、地域行事に誘われる回数もおおくなった。

(9) 今後の改善点について

- ・イベント的な行事では、学習者の参加が多いが、通常の教室活動にもっと繋げる工夫を考える必要がある。
- ・毎回のふり返しを検討し、習得度の評価に繋げることができるよう、更に指導者が意識できるような機会をもっと増やすと良い。

取組2-6: 防災を学び、災害に備えよう！

(1) 体制整備に向けた取組の目標

- ①尾張北部の各日本語教育機関の指導者が「生活者としての外国人」に対するカリキュラム案を活用し、場面想定で工夫を凝らせた指導が、できるようになる。
- ②ポートフォリオ等を活用し、学習者の日本語習得の評価ができるようになる。
- ③日本人の参加者と仲良くなり、今後、さらに社会参画できることに繋がる。
- ④同じ課題や、ライフステージを持つ学習者同志で、仲間や自助組織づくりに繋がる。

(2) 取組内容

- ①学習者が災害について学んで、日本で、より安心できるような日本語教室の開催。
- ②体験や生活上の行為に重点をおいた犬山日本語教室にとって、はじめてのプログラムで、ふり返しシートを使い、読み書きも含めた生活に必要な日本語習得を目指した。

(3) 対象者

・犬山市及び近郊に住む外国人と地域住民

(4) 参加者の総数 21 人※延べ人数ではなく、参加した人数を記載

そのうちの日本語学習者数 19 人

【出身・国籍別内訳】

中国	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパール	インドネシア	タイ	ペルー	フィリピン	日本
3	2		12			1		1	2

※その他の国籍と人数：

(5) 開催時間数(回数)

・ 6 時間 (2 時間 × 全 3 回)

(6) 活動の内容

回	開講日時	時間数	場所	受講者数	取組のテーマ	授業概要	指導者名	補助者名
1	平成 28 年 1 月 17 日(日) 10:00~12:00	2 時間	犬山国際観光センター フロイデ	19	災害に備えよう1	災害に関する日本語を学び、自分の避難場所を知る。緊急カードをつくる。	後藤好美 永井真知子 松本里美	神谷澄枝
2	平成 28 年 1 月 24 日(日) 10:00~12:00	2 時間	犬山国際観光センター フロイデ	16	災害に備えよう2	家庭でできる防災を学ぶ 備蓄・非常用持ち出し袋等	後藤好美 永井真知子 松本里美	神谷澄枝
3	平成 28 年 2 月 7 日(日) 10:00~12:00	2 時間	犬山国際観光センター フロイデ	17	117番 110 番、 119 番と、 ふり返し	・実際のかけ方をロールプレイして、防災での学びをふり返る ・全体振り返り、パンフレットへの意見を聞く。	後藤好美 永井真知子 松本里美	神谷澄枝

※学習者は、1 月 31 日の「地域で安全にくらすために、おまわりさんの話をきこう」にも参加、計 8 時間の受講。

(7) 特徴的な活動風景

取組事例①

【第 1 回 28 年 1 月 17 日】

・教材例集から、災害について知っている「ことば」を出し合い、記すことのできる人は、書く。



取組事例②

【第1回 28年1月24日】

「非常用持ち出し袋」に、入ると良いものを相談し、書き出す学習者。

どんな「物」が必要かは分かっているが、「にほんごで、なまえ」が、わからない

「人によって、家族によって、必要なものが違う」ことが、分かった。



(8) 目標の達成状況・成果

- ・学習者には研修生が多く、日本語学習の意欲が強く、知識もとても豊富だが、「生活者」という観点からは遠く、災害時の避難場所等を初めて知る人も多く、まず、防災に対する意識が芽生えた。
- ・日本語能力試験受験の指導が多いボランティア指導者が、カリキュラム案・教材例集を初めて知り、望んだ授業、今後の活用の広がり期待したい。
- ・この地域で、カリキュラム案を活用する教室が一つ増える結果となった。

(9) 今後の改善点について

- ・N3 対象者のなかには、N2 合格者もいて、読み書きがある程度できる学習者には、ふり返しシートの形式や記入の仕方を工夫した方が良いのでは。
- ・学習者が、学習の場としての体験のみでなく、地域住民とのつながりの場としても、日本語教室を求めている感があり、そのプログラムの必要性を感じた。

取組3:ネットワークによる日本語教室紹介チラシを多言語で作成、発表。

(1) 体制整備に向けた取組の目標

- ・パンフレットを作成することにより、「自分たちの教室を見つめなおす」ことができ、学習者の意欲があがる。
- ・より「生活者」としての視点から、カリキュラム案を活用した各教室の体制整備が進む。
- ・必要な機関・窓口へパンフレットを設置することで、尾張北部地域の教室を、広く「生活者としての外国人」に知らせることができる。
- ・各日本語教室の特徴や学習者の必要性によって選ぶことができる。また、勤務体制が変わっても、日本語学習の機会を減らさないことが、できる。

(2) 取組内容

- ・取組2の各教室で、学習者自身の振り返り評価・反省・を言い合う時間を取り、パンフレットに「学習者からのメッセージ」として反映させる。

・パンフレットの内容については、取組1のネットワーク会議で、学習者の意見・各教室の状況・必要事項などを何度も話し合ったうえで、翻訳言語・掲載内容等を決定。

・パンフレットを各市町(2市2町)の住民課などの窓口や小学校などへ配布、転入する

(3) 対象者

・尾張北部の各日本語教室に通う外国人、日本語ボランティア、取組 1 ネットワーク会議の参加メンバー等。

(4) 参加者の総数

・日本語教室参加者とネットワーク参加メンバー、総数 144 人。

(5) 開催時間数

・ネットワーク会議での協議時間:5 回、2 時間 30 分、各教室での協議時間 2 時間 30 分(5 教室)

(6)活動の内容：

・パンフレット作成に当たり、第 6 回(10/7)、8 回(11/16)、9 回(12/14)、10 回(1/18)、11 回(2/15) ネットワーク会議での協議の結果、どんな人に利用してほしいか？どんな内容が必要か？学習者が知りたい内容は？各教室の特徴を！など、協議した。

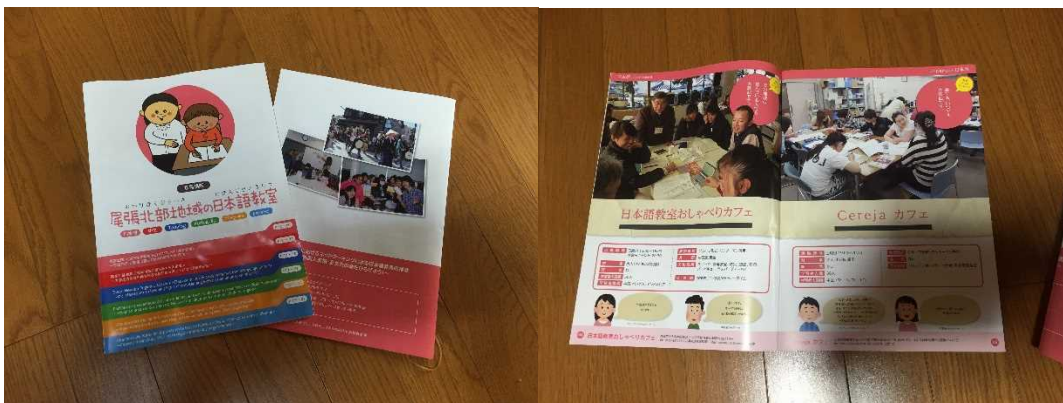
・各教室活動の最終日等に、学習者の振り返り時間を多めに取り、そのなかで、自身の通う教室についての特徴や、気に入っていること(アピールできること)等を話し合った。

・完成したパンフレットを行政の窓口や小中学校など、必要とされる機関へ配布した。

・デザイン・作成は、多文化共生リソースセンター東海に再委託した。

(6) 特徴的な活動風景:記録なし

「尾張北部地域の日本語教室」～多言語版～



パンフレットは、尾張北部地域5つの日本語教室を 日本・スペイン・中国・ポルトガル・ベトナム・タガログ語の 6 言語で紹介した。

(7) 目標の達成状況・成果

・パンフレット作成に当たり、第 6 回(10/7)、8 回(11/16)、9 回(12/14)、10 回(1/18)、11 回(2/15) ネットワーク会議での協議の結果、どんな人に利用してほしいか？どんな内容が必要か？学習者が知りたい内容は？各教室の特徴を！などと、内容がはっきりし、議論の中で、改めて「尾張北部でネットワークを組む意義」を確認できた。

・学習者は、自身の教室を振り返り、みなで話し合うことで、日本語の上達につながり、また日本語や

教室の必要性にも気づき、モチベーションが上がった。

- ・行政の窓口や小中学校など、必要とされる機関への配布をすることで、必要な外国人に、必要な情報が届くようになると、予想される。また、関係者にも各市町の地域日本語教室の存在を周知できた。
- ・一方で、作成が遅れたため、尾張地域全体での「作成報告会」が実施できず、次年度に、持ち起こしてしまった。

(8) 今後の改善点

- ・部数が限られているため、配布方法等に制限があるので、増す刷り等、予算がかからない方法で、継続したい。
- ・今回は、6ヶ国語の多言語版に留まったが、英語・韓国語・ネパール語・トルコ語など、ニーズが増えているので、対応を検討したい。
- ・持ち越した「作成報告」を次年度、実施する。

取組4: 多文化共生フォーラム 2015 ～共生の輪を広げよう～

(1) 体制整備に向けた取組の目標

- ・他分野の市民団体がフォーラムに関わることで、多文化共生と「多文化共生の日本語教育」への理解が進み、また今後の「日本語教育」に向けて、地域の団体が加わり、より一層の内容充実が図れる。
- ・この地域での外国人支援のネットワークの広がりが期待できる。

(2) 取組内容

- ・3部構成から成る多文化共生啓発のためのシンポジウム。
- ・第1部では、ボランティアや広く一般に向けた榎田勝利氏の基調講演。第2部では、各分科会に分かれて(防災を考える・外国につながる子どもと共に・外国人とのコミュニケーションを考える)の討議、まとめの第3部では、共に参加した日本人の視点・生活者としての外国人の視点の検証をし、多文化共生のまちづくりの必要性和、「生活者としての外国人」のための日本語教育の意義を全体で共有し、確認する。

(3) 対象者

- ・多文化共生・ボランティアに関心ある一般、外国人住民

(4) 参加者の総数 106 人※延べ人数ではなく、参加した人数を記載

そのうちの日本語学習者数 30 人

【出身・国籍別内訳】

中国	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパール	インドネシア	タイ	ペルー	フィリピン	日本
4		5	5	2		1	8	2	76

※その他の国籍と人数: モンゴル 2、ロシア 1

(5) 開催時間数(回数)

・ 4 時間 (4 時間 × 全 1 回)

(6) 活動の内容

回	開講日時	時間数	場所	受講者数	取組のテーマ	プログラム	講演・担当者	司会・コーディネーター等
---	------	-----	----	------	--------	-------	--------	--------------

1	平成 27 年 7 月 12 日(日) 13:00-17:00	4 時間	犬山国際 観光センタ ーフロイデ	106 人	多文化共生フォーラム 2015 ～共生の輪を広げよう～	基調講演	榎田勝利	全体進行 米勢治子
				(45)	防災を考える ～ 避難所運営ゲームを 通じて～	分科会 1	進行 犬山市防災 安全課 仙田大騎	防災リーダ ー会 犬山 林英敏 松田一雄 尾関博 三橋みよ子 高木 優 吉田正克 通訳:
				(33)	外国異につながる子どもと 共に	分科会 2	ファシリテ ーター: 松本一子	補助 早瀬裕子 松本晃 通訳:
				(28)	外国人とのコミュニケーション を考える	分科会 3	ファシリテ ーター: 米勢治子	補助: 斉藤輝幸 パネラー: 馬永森 田中セシリア 大沢悦子 通訳:
					まとめと報告		コメンテータ 榎田勝利 松本一子 米勢治子	全体託児: 河村礼子 本間敏代 小谷千鶴

(7) 特徴的な活動風景

取組事例①

【27 年 7 月 12 日】

分科会 1: ファシリテーター: 犬山市役所防災安全課 仙田大騎氏、補助者: あいち防災リーダー会犬山
外国人と地域住民が共に助け合い、避難所運営ゲーム(HUG)に挑戦、静岡県西部危機管理局
より、「外国偉人向け」に開発した HUG(試行版)を借用することができ、県外ではじめての実施
になった。

実施に際して、犬山市役所・あいち防災リーダー会いぬやまの協力を得、事前にやさしい日本語
の共通認識のため、打ち合わせを繰り返した。

日本人住民・外国人が同じ班に分かれ、日本人が日本語のフォローをしながら、避難所での
過ごしやすいものにする為に、それぞれの立場で、あるいは立場を越えて考えることができた。



取組事例②

【27 年 7 月 12 日】

分科会 2: ファシリテーター: 松本一子氏 発表者: ふくらの家子ども塾、シェイクハンズ寺子屋 の子ども達

外国につながる子ども達の発表を通じて、この地域での教育・日本語学習支援の場、子育て支援の場などを参加者とともに考えた。また、外国につながる子どもたちにとっては、地域参加の場とともに、自分達の学習の場(日本語塾)の存在を考え、貴重な場と気づくことができた。



取組事例②

【27 年 7 月 12 日】

分科会3:ファシリテーター 米勢治子氏

・3 人のパネラーの話を元に、地域住民としての外国人とのコミュニケーションを 共に何が必要か、互いにどんなことが大切か、また、その為には 何が課題かを考えた。

(8) 目標の達成状況・成果

- ・まず、大勢の人が参加して、「多文化共生」の啓発イベントとしては、及第点だった。
- ・市長や行政関係者が参加してくれることで、行政の理解を進める少ない機会のひとつだった。
- ・他の分野の市民団体と一緒にフォーラムをつくる感があり、その過程がとても良い啓発になった。
- ・今回は、特に防災リーダー会が、外国人向けの防災活動を今後、視野に入れることになった。

アンケートより (106 人中、54 人提出)

1. 基調講演について、「とても分かりやすい内容」が 100 パーセントの結果

意見として: 多文化共生は難しいが、身構えず、気楽に付き合えるといい。

人として、とても当たり前の生き方だと思えた。

「声の小さい人、声なき人の声に、心をむけて」のことばに感動。

自分にとってのボランティアの意義がよく分かった。 など

榎田さんの講演は、誰でもわかりやすいことばと内容であった。

多文化共生は誰でもが暮らしやすい社会をつくること、その為に、自分は何ができるかを考えることと、明確だった。

2. 分科会について

分科会1 とても良かった 13人 やや分かりにくかった 4人 分かりにくかった 3人

意見として: HUG は、とてもさまざまな人の立場に立てるゲーム。

初めて、避難所という場所の実感を持った・外国人には、とても難しいと思う。

日本人のフォローが足りなかった。・日本人、外国人一緒にやることが大切。

防災リーダー会には、大変協力を仰げ、外国人と日本人が共に HUG に挑戦する貴重な機会になった。災害を体験したことのない、災害の少ない国から来た外国人にとって、災害災害を身近かに感じる機会になったのでは。

アンケート結果を 貸し出しを許可元の静岡県西部危機管理局に送付した。

分科会2 とても良かった 14人 やや分かりにくかった 2人

意見として: 自分の子どもたちは、幸せと思った。(親)

日本の子と同じような状況になってほしい。

子ども達の出番ができて、良かった【指導者】

外国につながる子ども達のこと分かってよかった。

「子どもたちが自分の塾のことを見つめるいい機会になった。」と、指導者からの

意見が多くあった。また、一緒に発表の模造紙を作ったりして、子ども達の連帯感が出たとの意見もあった。親以外の参加者からは、実情を初めて知ったとの意見。

分科会3 とても良かった 16人 やや分かりにくかった 2人

意見として: 「日本語が分からないから、伝わらない」だけではない ことが分かった。

外国人と一緒に話す機会がめったにないが、とても良い機会。だが、日常的には少ないのでは？

楽しい場だったので、このイメージを大切にしたい。

日本語教室のイメージが変わった。

(9) 今後の改善点について

・フォーラム全体:

・全体的に時間がなく、「まとめ」で、参加者全体での「共有」ができたかが疑問なので、全体の時間や配分などに、一考を要する。

・大きさでなく、この分科会のテーマで日常的な取組をし、もう少し地域と一体感が持てる企画とし、全体と部分のバランスで、多文化共生の啓発を考えていきたい。

8. 事業に対する評価について

(1) 事業の目的・目標

・平成25年度・26年度と、尾張北部地域の日本語教育機関・外国人支援機関のネットワークづくりと、その充実を図ってきた。26年度には特に更なる強化と啓蒙のためシンポジウムを、外国人支援機関だけでなく、地域組織・ネットワーク団体等で共催。地域活動団体との関係構築・連携も目指し、「生活者としての外国人」のための日本語教室を協働で運営。27年度は、企業や他分野の複数団体とも恒常的なネットワーク形成のためのネットワーク会議とし、その成果と経緯を検証し発信する事に重点を置く。

(2) 目的・目標の達成状況・事業の成果

- ・＜取組1＞のネットワーク会議では、尾北地域の日本語教育機関や各教室が、毎月一度に定期的に会すことで、日常的な情報交換が当然の事となった。またその情報を、自分の場にフィードバックさせることができたという意見がネットワーク会議で、とりわけ多く見られた。この市町を越えてのネットワークを今後も継続・発展していきたい。ネットワーク会議そのものが、情報共有・発信だけでなく、常に検証の場の一つとして、機能できる意味は大きい。
- ・＜取組2＞2市2町の日本語教室で、今年度は、大口町以外の教室(4教室で6つのターム)がカリキュラム案を活用し、「生活者としての外国人」のための教室が開催できた。大口町も次年度では、江南市との協働開催を準備しているので、この地域では、『生活者としての・・・』教室が定着しつつある。また、関係機関に協力を求めて実施ができ、多文化共生の参加の学習者も自身の生活のなかで、できる行為が増えつつあるのを実感し、それぞれの参加数も上昇傾向にある。
- ・指導者も体験型のプログラムの作成・ポートフォリオ(ふり返しシート)を授業のなかで、きちんと活用できるようになった。特に当会のボランティア指導者の指導力が上がった。
- ・＜取組3＞教室で学習者の声を聞きながら、それぞれの教室をアピールし、市町を越えた日本語教室の案内パンフレットを制作。各行政の窓口や必要機関に設置することで、外国人が自分の生活や仕事時間・交通の便・ニーズなどにあわせての教室選びができる。散在地域での市町を越えたこの試みは、同時にパンフレットそのものが、情報・成果発信の成果物となった。
- ・＜取組4＞多文化共生フォーラムは、106人の参加者を得ることができ、他分野で活動している人にとっても関心が広がりつつあるのが、覗かれた。基調講演では、榎田氏が誰にでもわかりやすいことばで講演してくださったので、参加した外国人を含む誰にでもよく理解できたと、アンケートの多くに記されていた。また、多文化共生を外国人と日本人との問題だけでなく、障がいや社会的不利を被っている人も含めて、全ての人の問題として、『「声が出せない人、小さな人の声なき声」を聴ける人・社会であってほしい。』が共感を得た。
 - ・分科会では、防災リーダー会いぬやまの方々と共に、初めて外国人向け仕様の避難所運営ゲームを実施、日本人と外国人が共に助け合って、実施した。言葉の問題だけでなく、さまざまな人・考えがあるので、避難所での寝る場所を決めるのにも、多様・多面的な考え方が必要と参加者全員が実感した。
 - ・また、外国人仕様の避難所運営ゲーム(HUG)貸し出しに当たっては、静岡県西部危機管理局の協力を得、(多文化共生リソースセンター東海を通じて)、使用後の意見交換・情報共有などができる見通しとなった。
 - ・防災リーダー会とは、再三にわたる打合せの中で、「やさしい日本語」による会話をご理解いただだけ、「今後の活動の中に多文化共生の視点を持たねば」との感想をいただいた。フォーラム前後にはネットワーク会議への参加もして、特に7/31には、一緒にWSをして

もらい、意見を聞くことができた。今後、愛知県リーダー会を通して、江南教室でも実施の方向が決まった事も成果。

- ・第2分科会、第3分科会でも活発に意見が出て、とても有意義とのアンケート結果をいただいたが、参加した方が、それぞれ立場を超えて、共に「多文化共生」を身近な事として受け止め、またそれぞれの現場で、芽吹かせたり、反映をしていただける事が予感できる結果となった。
- ・日本語教室では、丹羽消防署、防災センターの協力を得、特に犬山警察署には、刑事課以外の全課を挙げての協力が得られ、警察のなかでも「多文化共生」が認識されるようになった。
- ・また、託児グループが少なく、立ち上がったばかりの「てんとうむし」が、ほとんどの託児を担当し、外国の子どもと共に楽しめる遊びを研究したり、学齢期の子どもには日本語指導してくれるなど、思わぬ波及効果があった。
- ・一つのイベントを共に作り上げていくことで、協働する相手や組織に、「多文化共生」の意識が伝えていける、活動例となった。
- ・アンケートだけでなく、取組1のネットワーク会議が、常に反省の場・検証の場になっていることが改めて確認できた。

(3) 地域における事業の効果, 成果

- ・尾張北部地域の各日本語教室が「多文化共生」にシフトしたプログラムを実施できるようになってきた。

それと共に、地域の他団体とも関係性が構築できるようになり、「多文化共生」のことがばや意識が浸透し始めた。

- ・多文化共生フォーラムには、106人が集まり、市長を始め行政関係者も、分科会にまで出席し、散在地区ではあるが、多文化共生に関心が出てきたことを覗かせた。
- ・社会教育の場、青少年育成の会議、男女共同参画などでも、「多文化共生」の視点を持った活動が取り入れられるようになった。ネットワーク会議の場に、行政職員や他団体が参加したことが少しつながったのでは。
- ・各日本語教室が互いの情報を取り込み、自団体の活動に反映するなど、ネットワークによる効果が始めてきた。この文化庁事業で3年の成果が、確実に出てきた。

(4) 地域の関係者との連携による効果, 成果

- ・犬山防災リーダー会・・・多文化共生フォーラムの分科会で「避難所運営ゲーム」を実施。
前後にはネットワーク会議で、情報伝達や反省も共有。やさしい日本語での認識も共有。次年度今後も協働できる素地ができている。
- ・江南防災リーダー会・日赤奉仕団江南支部・・・日本語教室で災害図上訓練と、炊き出し指導などを担当。外国籍住民ともFace to faceの関係性もできつつある。
- ・犬山ロータリークラブ・・・去年の文化庁事業からの連携で、フォーラムの折の広報や一部協賛が可能になった。
- ・託児サークル「てんとうむし」・・・一連の文化庁事業を通じて、多文化共生の子育て支援に興味を持ち、次年度以降も共に活動ができる。
- ・丹羽消防署・犬山警察署・・・毎年、防災・安全・安心の日本語教室に協力してもらえるが、特に犬山警察署は、全面的に「多文化共生推進」を推進。次年度に向けて、協働イベントを計画中。

(5) 事業実施に当たっての周知・広報と、事業成果の地域への発信等について

- ・基本的には、ネットワーク会議中心の募集・広報に加え、2市2町の広報紙、近郊の公共施設、外国人よく利用する店舗などを利用して貰ったが、外国人の口コミ効果が一番だった。
- ・成果発信としては、地域共通のパンフレットを行政等の窓口を設置し、外国人はもちろん、行政担当者にも、本事業を理解してもらう。
- ・尾張地域の地方紙「ホームニュース」が、この事業を取材し、新聞に掲載された。
- ・今後、パンフレットの作成を機会に、日本語教室見本市などを協働開催し、広く一般に、成果発信していく予定。

(6) 改善点、今後の課題について

- ・ネットワーク会議のメンバーが増えて、情報の共有が日常的になったが、人数や分野が広がると、会議での焦点のあて方が難しくなるのを感じる(開催日を決定もむずかしい)、また一方で、まだまだ異分野の参加や地域のキーパーソンなども望まれるので、ネットワーク会議のあり方にとても工夫が必要になってきている。
- ・成果の発信で、当初計画していた「多言語版日本語教室パンフレット」作成発表会が、作成遅れ会場がとれず、次年度に回ってしまったが、次年度は必ず、作成する過程や、多文化共生の日本語教室の素晴らしさをできるだけ早い時期に開催していきたい。

(7) その他参考資料